

支援をつなぐ

発表者 金山 麻未（認定こども園あけぼの幼稚園）
 指導助言者 勝部 百合（米子市福祉保健部こども未来局
 こども相談課担当課長補佐兼指導主事）
 司会者 石橋 美咲子（認定こども園あけぼの幼稚園）
 記録者 錦織 加奈（認定こども園あけぼの幼稚園）
 森藤 文子（認定こども園あけぼの幼稚園）

1. 発表の概要

(1) 主題設定の理由

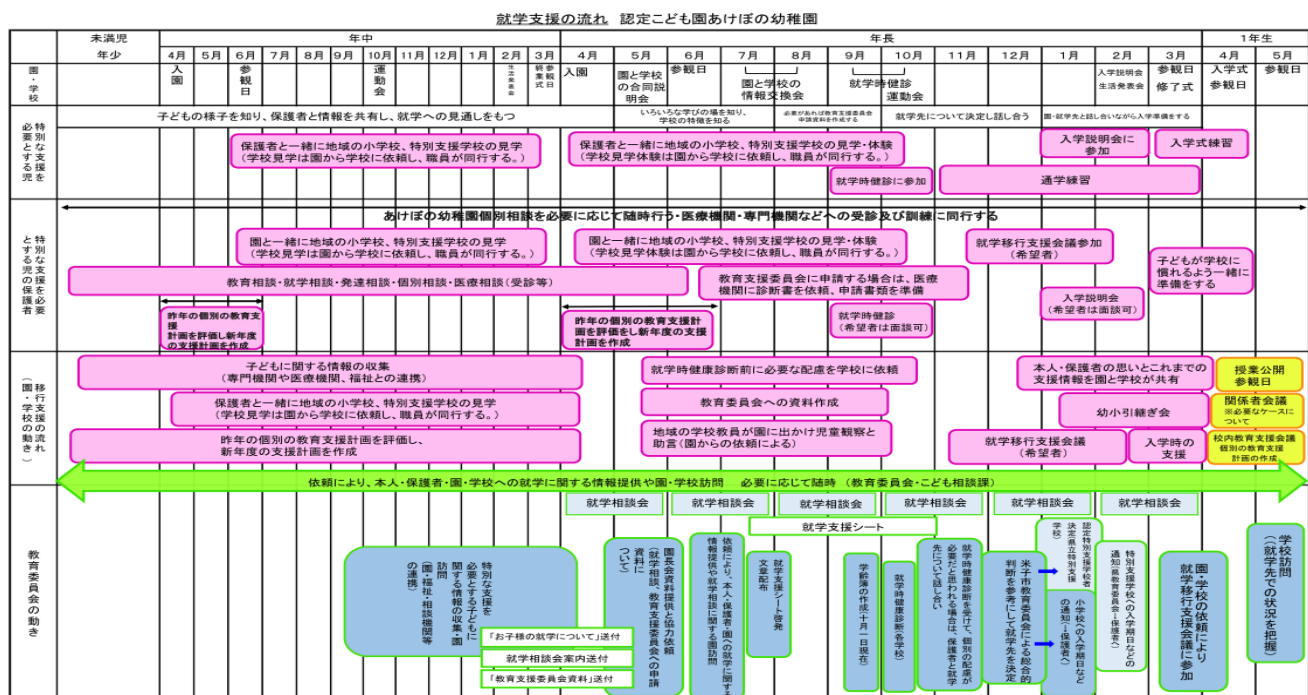
園での集団生活をしていく中で、特別な配慮を要する子どもたちがいる。私たち保育教諭はどのように支援し集団生活をうまく送っていきけるかを日々考えながら保育にあたっている。本園での特別な支援を必要とする子への教育体制で配慮している内容としては

- ・正担任と障がい児専任保育教諭の連携により、教育体制の充実を図っている。（正担任は学級全体の幼児を保育し、障がい児専任保育教諭で障害児の指導に当たっている）
- ・クラスを主体として学年、園全体で指導・援助を行い、教育体制の充実を図っている。
- ・全職員で園内研修を行い、共通理解を計ると共に、各種研修会への参加後、研修内容の伝達を行っている。

又、もっとも大切な保護者との関係は信頼関係を築き共に子育てがしていけるように、一つの方法として連絡ノートなどを作り、子どもの共通理解をできるようにしている。この研究を行う中で、今まで行ってきた支援をつなぐ方法を再検討し、特別支援教育について掘り下げて考えていくためこの研究のテーマとした。

(2) 年間の特別支援教育の取り組みについて

○あけぼの幼稚園で行っている就学支援の流れについて【図1】



・「園・小学校合同情報交換会」について

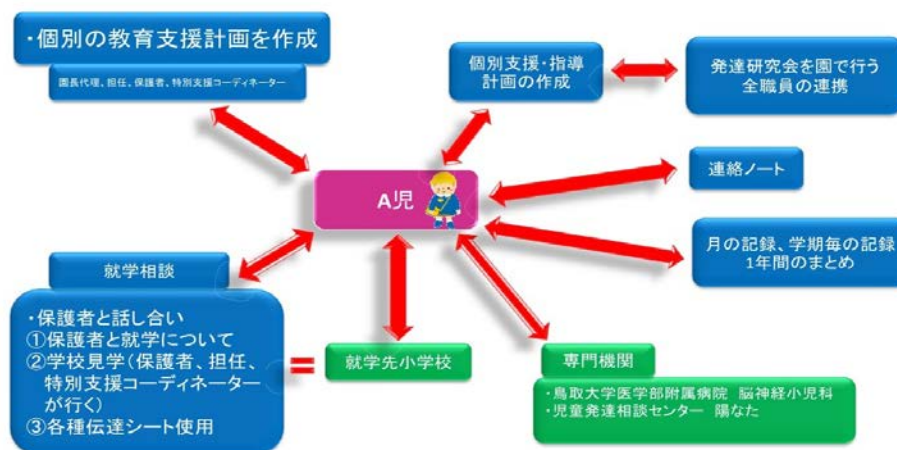
情報交換会では、小学校教諭と面談し、気になる子や支援の必要な子についての情報を、すこやか伝達シートを見ながら伝達している。

- ・1月頃より、幼小連絡会を実施し、小学校の先生が来園しひとりひとりの子どもの様子の伝達を行っている。また昨年度より、米子市内の小学校へ就学する年長児全員分の就学予定児引継ぎシートの作成をしている。

○外部機関との連携について



○A 児を取り巻く支援体制について



- ・年度当初に保護者と個別の教育支援計画を作成し、それに沿って個別支援・指導計画を作成している。それをもとに年4回発達研究会を設け、職員との連携を図っている。
- ・保護者とは毎日連絡ノートのやり取りをしている。
- ・月の記録や学期ごとの記録、1年間のまとめをし、年度ごとに製本している。
- ・小学校とは秋頃に就学先の小学校見学を行い、年長児になった際に各種伝達シートを使用して、支援をつないでいこうと考えている。

○園内で使っている支援グッズについて

- ・園内で統一したボードとカードを使い、1日の予定を知らせている。【図3】

【図3】

園内統一スケジュールカード (一部抜粋)



- ・手先の不器用さからボタンの止め外しが楽しくできるようになるために、フェルトで電車を作り、連結ができる。【図4】
- ・お金を数えることが好きな子が待ち時間に待つことができるように、リングに札束を入れている。【図5】
- ・体操服をお店屋さんのようにたたみたいということで、難しい服のたたみ方の手順表を見えるようにしている。【図6】手順表には、一覧表の人もいるが、この一覧表を使うためには、まず写真の意味が分かり、数が分かり、上と下が分かって初めて使えるので、難しい子の場合は、じゃばら折にしたスケジュールで、1つ1つ提示していくようにしたり【図7】、取り外しができ、外してフィニッシュBOXに入れるものなど、個によって対応を変えている。【図8】

【図4】



【図5】



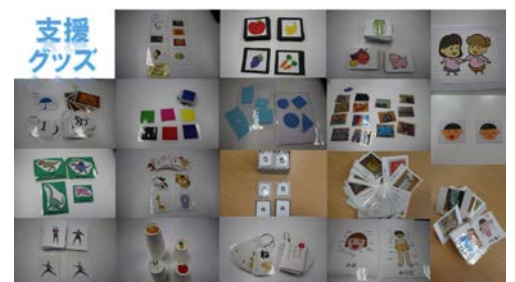
【図6】



【図7】



【図8】



(3)実践例

○A児のあゆみについて

- ・平成30年4月に本園に入園。入園前に、その年の秋に行われた入園説明会、翌年2月に行われた新入園児1日入園での面接と、特別支援コーディネーターと管理栄養士との個別面談、家庭訪問を行い保護者からA児についての情報を得た後にクラス分けを行い担任へ引継ぎをした。A児は、父・母・兄の4人家族で、発育は良好であったが3歳児健診の際に保健師の質問に受け答えできず、各健診も泣いて嫌がる様子が見られた。内診を担当した鳥取大学医学部附属病院、脳神経小児科の医師に、発達がゆっくりかもしれないといわれた経緯があり、後日同機関を受診後、平成30年3月に自閉症スペクトラム障害の診断を受けた。その年の6月には、対人関係の未熟さから、個別の療育を受けることを勧められ、児童発達相談センター陽なたで月4回療育を受けている。

入園当初からバス通園が気に入り、朝はスムーズに登園していた。しかし、しばらくすると自分の落ち着ける場所がみつからず、園内を歩き回る姿が見られた。大人との関係は良好であったため、その様な時には保育教諭がA児の好きなグッズを事前に準備し、それを利用したり、楽しみにしている活動を知らせ、クラスが自分の居場所だと思えるように配慮した。初めての場所や活動が苦手な参加が難しいこともあったが記憶力が良く、一度経験すると参加できる活動もあった。また、整理整頓が上手で、持ち物の管理ができた。しかし、園生活が始まり1か月くらいたつと感覚の過敏さがみられ、手の汚れを嫌い、活動内容によっては参加状況は様々であった。困った場面では発信ができず、泣いていることがあった。一度泣いてしまうと、その日1日中ちょっとしたことで苛立ったり、泣くことが多く、家庭に帰ってからも気持ちを引きずり、いつもはできていることができなかつたり、上手いかなかつたりする姿があった。

幼稚園における目標は、

- ・自分の気持ちを上手に表現できるようになること
 - ・困ったときに助けを求めることができるような方法を身に着けること
- そのための支援として
- ・見える化を行い、自分の場所をシールなどで知らせる
 - ・気持ちに寄り添い、その場にあった言葉をしらせていく

嫌な事を自分の言葉で伝えられるようになった。「できません」「助けて下さい」など場面に合った単語が言えるようになった。それができるようになり、少しずつ解決できるようになり、同時に、参加できる活動が増えた。

見える化で、大好きな車のシールを自分の座る椅子に貼ったことにより、自分の居場所がわかるようになった。朝の会などでも、A児の座る場所を保育教諭の前にし、自分に話しかけてもらっているという意識をもてるようにした。これを継続してきたことにより、6月以降はシールが必要なくなり、保育教諭の言葉かけで過ごせるようになった。初めてする活動は、具体的に伝え、細かな説明を必要とすることがあるため、現在も継続して行っている。

(4)反省と考察

A児が本園に不安なく入園するために、園長・園長代理・特別支援コーディネーター・

管理栄養士等と面談を行った。面談での情報をもとに、クラス・担任・加配保育教諭が決まり、スムーズな就園につながった。また入園後の様子もすぐにかかりつけの鳥取大学医学部附属病院・脳神経小児科の医師に伝える事ができ、その際主治医より「人とのコミュニケーションの際に伝え方に課題があり個別の療育が必要である」と指示をうけた。それをもとに園より療育の場を紹介し、児童発達相談センター陽なたの利用につながった。園での課題を保護者と共有し、専門機関や担任以外の人とつながる事の効果を実感している。

年度当初に保護者・園長代理・担任・特別支援コーディネーターと個別の教育支援計画を作成した。それによりそれまでの振り返りができ、前年度で伸びたところや達成したこと、新年度に目標として考えていきたいことをみんなで考え共通理解できる点がとても良かった。

新年度の目標をもとに保護者との話し合いの中で小学校見学の話を進めていき、見学は2学期以降に担任・特別支援コーディネーターが同席し行う予定である。

年4回発達研究会を行い、定期的な振り返りができ、支援の仕方の共通理解もできているため、小学校へのつなぎも無理なく進めることができる様になっている。

専門機関や医療機関にも同行し、保護者と共に主治医から適切なアドバイスを受ける事ができ園生活・保育にいかせている。それらを行うことにより保護者と共通理解ができ、子どもの発達の状況がわかり、より良い支援を行うことができている。

(5) 今後の課題

- ・前年度の担任との引き継ぎがより良いものになる為に、進級後の姿をクラス参観してもらう機会をつくること。
- ・発達研究会等で、担任以外の人から見た様子を聞き、その子の支援につなげていくこと。
- ・就学を見据えて、どんな力をつけていきたいかを明確にし、その子の成長につながるように保育を工夫する。
- ・入学後の学校生活の様子を見ることにより、園生活での振り返りができるので、本園とさまざまな学校の間を密にする。

集団の中で子ども達が安心してすごせる支援を園の全職員で行い、うまくいった支援をつなぐことの大切さを改めて感じる事ができた。これからも医療機関・専門機関と連携をとりながら、特別支援について学んでいきたいと思っている。園内で行っているうまくいった支援をさまざまな学校へつなぎ、入学後、子ども達がスムーズに生活できるように情報を共有していきたい。また、保護者とも連携を密にし、同じ思いで向き合い成長の喜びを共に感じていきたい。

○支援をつなぐために工夫していきたいこと

- ① 入園までの状況を詳しく聞き取り、環境を整える。
- ② 保護者との関係を大切にする。
- ③ 保育教諭が見通しをもって対応する。
- ④ 園内の連携を大切にする。
- ⑤ 関係機関との連携。
- ⑥ 就学に向けて小学校を見学し、必要に応じて教育委員会との連携をもとに、各種シ

ートを作成する。

2 研究討議

(1) 各市（各園）の就学支援への取り組みについて情報交換

<鳥取市>

発達支援センターより巡回相談にきてもらう。

5歳児発達健診を利用する。

移行支援会議を行う。

<倉吉市>

医療機関等の専門機関も交えて移行支援会議を行う。（年4～5回）

<境港市>

保護者、教育委員会との話し合いを行う。（年4～5回）

教育委員会の様子を年数回見に来てもらっている。

<米子市>

保護者と共に学校見学に行く。

情報交換会で子どもの様子を伝達する。

就学支援シートで子どもの様子を伝達する。

専門機関と話し合いをする。

事前アンケートへの返答

○ごはんと揚げ物以外は受け付けない場合の食事指導の進め方について悩んでいる

取り組んでいる支援

良いモデルを示す、野菜の栽培を行ない、食べ物に興味をもてるようにする

指導助言の先生より

- ・なかなか改善しないのは、こだわりや感覚の過敏性があると考えられる。
- ・その子のマイルールが偏食に繋がっているのではないか。
- ・家庭のルールと園のルールの違いに戸惑っているのではないか。
- ・食べられない理由や背景を探り、保護者と相談しながら指導の進め方を決めていく。
- ・家庭で食べているもの等の食べられるものから挑戦していく。
- ・約束した事は守る。（一口だけ食べようと言ったら、一口で終わりにする。）

○友だちとの関わりを求める様子があるが、友だちを突発的に押したり、友だちのおもちゃを取ったり壊したりして反応を楽しむ姿がある。適切な関わりではない子への効果的な支援の仕方は？

取り組んでいる支援

- ・友だちと関わりたい気持ちは尊重するようにしている。
- ・友だちを押したり、おもちゃを壊したりすることはいけないことだと理解することは難しい段階なのでどう伝えていったらいいか悩んでいる。

参加の先生から

- ・取られた（壊された）側の気持ちを伝えすぎると、当事者の子は自分の気持ちを受けとめてもらえないと感じるかもしれない。そこに配慮しながら、保育教諭が仲立ちと

なってお互いの気持ちを伝え合えるようにする。

- ・なぜ取ったか理由を聞き、正しい関わりを伝えて友だちと上手く遊べた、仲間に入れてもらえたという経験を積めるようにする。

指導助言の先生より

- ・就学前の子どもは、自分の気持ちをわかって欲しい子が多い。相手の友だちの気持ちを伝えることも大切だが、まずは、本人がどうしたかったのかどんな気持ちだったのかを聞き、気持ちを見取る。自分の気持ちがわかってもらえたという経験をたくさんすることで、相手の気持ちも受け入れられるようになる。
- ・年齢に応じて、正しい関わり方を伝えていく。
- ・取ったり壊れたりするものを置かない環境設定をする。
- ・物を取ったり壊す前にそのサインに気付いて事前に止める。
- ・問題行動が起こっていない時に約束をする。先生が来る＝注意されるという存在にならないようにする。

○集団での子どもの気になる姿をどのように伝えていったらよいか。

- ・保護者は心配しているが園では特に問題がない場合、家庭での関わり方と園での関わり方が異なるため、姿の違いが生じていると考えられる。まずは、家庭での関わりを聞くことでどういう場面で困っているのか、園で気にならないのは保育教諭の関わりが上手くいっているからではないか等、様々なことが見えてくる。家庭での関わりと園での関わりの共通理解をはかるようにする。
- ・園は心配しているが保護者は気にしていない場合、本人が困っている・苦戦しているということを伝えるようにする。また、園では気にならない場合と反対に、家庭での関わりが上手くいっていることが考えられるため、この場合も家庭での関わりを聞くと色々なことが見えてくる。
- ・園での様子を伝える時、状況によっては園長先生や特別支援コーディネーター等の担任以外の先生が伝える方が良い場合もある。

(2) グループ討議

- 支援のいる子どもが就学の際、学びの場へつなぐためにどのような工夫をしているか。
- 各園では、相談機関としてどのような場所を利用しているか。
- 各園で行われている支援と専門機関・健診などへのつなぎはどのように行っているか。
- 集団の中で子どもの気になる点を保護者へ伝える際にどのような工夫をしているか。

以上の題目のテーマについて協議した。

○支援のいる子どもが就学の際、学びの場へつなぐためにどのような工夫をしているか

- ・巡回相談を依頼する。
- ・秋ごろまでに小学校見学に行く（保護者、子ども同伴）。
- ・教育委員会に相談をして、園での支援が学校へつながるようにする。
- ・園で行っていた支援について、シート等を使って学校に引き継げるようにする。

○各園では、相談機関としてどのような場所を利用しているか

- ・発達支援センター

- ・教育支援センター
- ・療育センター

○各園で行われている支援と専門機関・健診などへのつなぎはどのように行っているか

- ・療育の場に同行し、支援方法を共有する。
- ・その子に関わる関係機関に集まってもらって情報を共有する。

○集団の中での子どもの気になる点を保護者へ伝える際の工夫

- ・送迎などの時間を利用し、雑談から話をつなげる。
- ・参観日で実態をみてもらう。
- ・進学先は保護者が決定する。うまく保護者に伝えるには難しさを感じる。
- ・保護者のタイプに合わせて話し方を工夫する。
- ・学校の力も借りる。
- ・伸びているところを多く伝え、できないところは頑張っているところとして伝える。
- ・まずは保護者との信頼関係を築く。一緒に取り組んでいきたいという気持ちを伝える。
- ・適切な時期に適切な機関につなげる。
- ・あけぼの幼稚園で使用している入園前の状況を知る調査用紙は効果的だと感じた。

3 指導助言（全体のまとめ）

支援をつなぐ三点について

① 園内支援体制

- ・特別な配慮を必要とする幼児への指導について、園内委員会を設置し、専門機関への助言や援助を要請して、計画的組織的に取り組む

園内委員会について

- ・4月の年度初めに配慮を要する児童の引継ぎ・情報共有する。
- ・9月10月に就学先、学びの場の選択をする。
- ・あけぼの幼稚園の場合、発達研究会が年4回行われている。
- ・発達研究会では、日々の支援をどのようにしていくのか、子どもへの支援の検討を定期的に行っている。それぞれの先生がいろんな意見や提案を積極的に発言している。エピソードだけでなく紙面も用意している。

② 就学支援

- ・保護者の意向を最大限に尊重しつつ、本人の教育を第一に考える姿勢を保つ。
- ・就学の仕組み・ルールを把握する。
- ・分からないことは教育委員会に聞き、正しい情報のもと就学支援を進める。

③ 移行期の支援

- ・必要な支援の継続性を確保する。
- ・従来の支援と評価の見直し、支援者・関係機関の引継ぎをする。

実態把握①教育方法②支援体制③施設設備

就学前と就学後で支援者が変わるため、支援の主体が変わる移行期はとくに留意する。

④ 新たな支援の見通し

- ・小学校と幼稚園の違いを理解し、必要に応じて年長時だけでなく、それまでの支援についても伝える。

- ・個別の指導計画を活用し、適切な目標設定と評価をする。その子にあった支援や配慮を伝達する。
適切な指導と必要な支援の積み重ねが、小学校への支援につながる。